

履歴書に代えて

その他のタイトル	Statt meines Lebenslaufes
著者	二宮 まや
雑誌名	独逸文學
巻	48
ページ	3-5
発行年	2004-03-19
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018074

履歴書に代えて

二 宮 ま や

私の生まれたのは昭和8年11月10日である。それは西暦1933年に当たり、ヒットラーが政権をとった年である。遠雷は聞こえていたのであろうか。独文に進んでからシラーと誕生日が同じであることを知った。父は裁判官であったので転勤が多かった。小学校に入るまでに5つの土地に住み、その後戦争中の疎開という事情も加わって、小学校は4校で学んだ。中学に進んだのは終戦の翌年である。母は心酔していた羽仁もと子の自由学園を薦めた。食糧難時代の寮生活もさることながら、休みごと年3回の東京一大阪間の往復は、切符の入手がまず大変、汽車は窓から乗り降り、今なら「のぞみ」で2時間半のところ15時間くらいかかったであろう。5年間ここにいた。実学を重んじる校風で、単なる知識は軽蔑された。特に女子部では、机に向かうよりも手や体を動かす方が良しとされた。音楽、美術、工芸、体操などが得意であったなら、一流の講師が招かれていたので、楽しく生き生きと才能を伸ばすことが出来たであろう。残念ながら私はそのどれもが苦手であった。

学制が新しくなり、中学3年高校3年その上に女子部は2年男子部は4年を乗せて、それで一貫教育の終了ということになった。しかしそれは新制大学ではなかった。自由学園独自の教育方針に文部省のお墨付きは不要、というのが創立以来の羽仁夫妻の信念である。男子部にいた3歳上の兄は他大学受験の道を選んだ。新制大学は女子にも門戸を開いた。2歳違いの姉は女学校にいたが京都大学の建築学科を目指した。私も学園の中退は落伍者あるいは反逆者扱いであったが、高3は実家の近くの公立高校に転校した。教科書、試験、単位、それに男女共学というものをそこで初めて経験した。受験勉強はそれまで禁じられていた世界でもあり、新鮮で面白かった。泥縄で一浪ののち又東京へ戻った。そんなことで大学から今に至るまで、基礎知識の不足には悩まされ続けている。その上生きることを大切にするバランス感覚が身についていて、なかなか

二 宮 ま や

か一筋の研究者になることが出来ない。それでいて学ぶことを私から取ってしまったら何も残らない気がする。

修士を了える頃は就職難の時代であった。手塚富雄先生は、研究は続けるように、そして自分たちが東大にいる間に博士論文を提出することを目標にするように、とやさしく励ましては下さったが、結婚して地方に移った女子など、先生方の持ち駒リストからは完全に消されてしまった。関西でクヴェレ会に入れて頂いて、そこで得た研究刺激や知己の恩恵は計り知れない。

アメリカに2年近く住んだりして子供が3人になった頃、大学の拡張期にさしかかって、クヴェレの縁で非常勤講師の口が次々と入った。その状態が3年続き、大学紛争が下火になった関西大学が、初めて専任で迎えてくれた。修士修了後ちょうど10年経った1970年である。当時関大文学部の女性教員は、国文学科に源氏物語の大家清水好子先生と体育に常に一人いるだけで、私と同年に英文学科に一人入ったがその方は間もなく退職した。独文の偏見のなさは敬服に値する。それを裏切ってはならないという気持ちは絶えずあった。目立つことは好きではなかったが、利用されるのは仕方がないと諦めた。

まだ助教授の時に文学部の研究室委員長というものがあって、それが初めて経験した役職であった。ちなみに独文の研究室が並んでいる階で、増築部分に法学部が入っているのは、実はその時の私の力不足の結果である。見るたびに申し訳無いと胸が痛む。教養部長は関大の宣伝政策であった。その縁でさまざまな原稿依頼があったり、読売新聞社のお正月に発表するエッセー賞の審査委員を、錚錚たる方々にまぎれて3年間つとめたりした。こういった仕事はいわば自由学園で受けた教育部分で切り抜けたが、いつも居心地が悪かった。阪神ドイツ文学会の会長もそうである。思い返すと様々な場面で引き立ててくださる方があったのに、おおよそ欲というものが欠如している私は、最低限の責を果たすにとどまった。在職中何一つこれということも無し得ず、慙愧に堪えない。しかし学生相手の授業は楽しかったし、独文の先生方は温かであった。多くの方との出会いは宝物である。とりわけ1987年度後期に許されたミュンヘンでの在外研究は、何ものにも代え難い経験であった。世間知らずを関西大学が育ててくださったと心から感謝している。

履歴書に代えて

研究の方はほそほそと続けているうちに、方法論も多様化したし、日本におけるドイツ語ドイツ文学の位置付けも大きく変わった。従来のやり方はもう通用しないかも知れないが、職を離れたら「社会のニーズ」をあまり気にしないで、好きなように勉強できるであろうか、それは私のニーズであり人間の精神のニーズにつながるかと考える。

34年もの間、関西大学の一員として働かせて頂いたこと皆様に心からお礼申し上げます。

2004年3月

学内役職等

関西大学教養部長 1980—1982
身体障害者等問題委員会委員 1982—1984
関西大学大学協議会協議員 1997—1999
視聴覚特別教室委員会委員長、『関西大学視聴覚教育』第27号編集委員長
2002—現在

所属学会役職等

ドイツ語学文学振興会評議員 1988—現在
十九世紀ドイツ文学研究会幹事 1989—1993
日本ゲーテ協会評議員 1993—現在、同監事 2003—現在
日本ゲーテ協会京阪神支部幹事 1994—現在
阪神ドイツ文学会会長（日本独文学会阪神支部長） 1996—2000

社会的活動

大阪府建築防災推進検討（のち推進）委員会委員（大阪府建築部建築指導課）
1981—1986
第5回、第6回、第7回 読売新聞社 読売賞エッセー審査員 1980、1981、
1982